様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：３２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０７４９

研究課題名（和文）大学の学部教育における終末期ケアに関する社会福祉士教育の実証的研究

研究課題名（英文）Research on the death attitude in the training of social work

研究代表者
村上　信（Murakami, Makoto）

淑徳大学・社会学部・教授

研究者番号：９０３３３２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：近年、援助者の死生観の未熟さ、利用者と共に死を見つめることへの恐怖や困難さ、さらに援助者が燃えつき症候群に陥ること等が指摘されている。以上の背景の中で、教育課程で社会と死を結びつけ、生活の一部としての死を捉えることが可能となる教育実践が求められている。そこで本研究では、死生観の醸成を意図した教育プログラムの実践とその有用性の評価を行った。その結果、死生観の中でも「死への恐怖・不安」「解放としての死」「人生における目的意識」に変化を認め、教育プログラムの一定の有用性が認められた。今後は、同様の教育を広く実践し、その妥当性の検討を深めるとともに、教育を受けた学生のフォローアップが必要である。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to examine an effectiveness of educational practice of death attitude. We conducted a statistical analysis of the data for 7 students excluding 1 domain of the death attitude. Our results show that specific domain of death attitude has been improved. Further studies are needed to understand how to improve remained domain of death attitude.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：実践力

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の本研究課題の背景としては、以下の 3 点を指摘できる。

① 2006 年より「介護保険」に「重度化対応加算・看取り介護加算」が新設されたのに基づき、介護保険施設でも介護報酬加算の算定要件のひとつに「看取り指針の作成」が必要とされ、看取りの理念を生かした指針作りと教育、さらに具体的なケアの実践が進められつつある。

② 2007 年「社会福祉士及び介護福祉士法の一部を改定する法律」の成立に伴い、「社会福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」が発表され、「求められる社会福祉士像」が示された。この内容は、総合的、かつ、包括的サービスを提供することの必要性、その在り方などに係る専門的な知識を身につける事が求められている。

③ 2008 年より後期高齢者医療制度の施行に伴って、終末期医療に関しても新たな制度が提案され、実施されている。このように、わが国が直面している高齢社会の医療制度・介護保険制度においては、「終末期」「看取り期」のあり方が課題となってきている。

２．研究の目的

上記の背景に基づき本研究では、「死生観」の醸成に資する教育プログラムを検討するとともに、その実践を通して有用性を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、①学生の「死生観」の現状把握、及び②教育実践の 2 部より構成される。

①については、下記の方法により実施した。

＜調査方法＞

本研究では、平成 23 年 7 月に S 大学の学生を対象として自記式のアンケート調査を実施した。調査は、無記名で実施し、調査への協力も本人の自由意思とした。

その結果、119 名の学生より回答を得た。

＜調査項目＞

死生観は、先行研究で信頼性、妥当性が示されている死生観尺度を用いた（平井、他 2000）。本尺度は、死後の世界観（4 項目）、死への恐怖・不安（4 項目）、解放としての死（4 項目）、死からの回避（4 項目）、人生における目的意識（4 項目）、死への関心（4 項目）、寿命感（4 項目）という 7 つの下位尺度から構成されている。学生には、「当てはまる」から「当てはまらない」の 7 つの選択肢より回答を求め、分析においては「当てはまる」を 7 点として「当てはまらない」が 1 点になるよう得点化した。

その他、性別、学年、特定の宗教の信仰、1 年以内の親しい人の死の経験、3 月 11 日の東日本大震災をきっかけに死について考えるようになったかに関する項目より質問紙を作成した。

また、②教育実践は下記の通り実施した。

＜教育実践＞

平成 25 年 5 月～7 月にかけて死生観教育の実践を行った。授業は、講義・グループワーク形式（計 16 時間、19 単元）であり、内容は表 1 に示す通りである。

表 1　教育内容

回	テーマ
1	死をどのように考えるか
2	死と社会
3	終末期に関する用語解説
4	死を迎える場所
5	老人漂流社会
6	親を家で看取る
7	施設における看取り
8	医療保険と介護保険からみる看取り
9	施設における終末期ケアと臨終期の対応
10	臨終期の身体の変化と対応
11	臨終期の環境整備とケア
12	キューブラロス・佐々木氏の死への段階
13	死期の 7 つの不安
14	死と希望・事例検討
15	エンゼルケアの技法
16	グリーフケア・残された家族支援
17	死後のカンファレンス
18	終末期の食事（意味づけと）演出
19	まとめ

＜教育実践の評価＞

教育効果の評価は、上述と同様に死生観尺度を用い（平井、他 2000）、前後比較により検討を行った。

４．研究成果

①学生の「死生観」の現状把握について

回答者は、男性 34 名（28.6%）、女性 85 名（71.4%）、学年は 2 年生が最も多く 102 名（85.7%）、続いて 4 年生 7 名（5.9%）、3 年生 6 名（5.0%）、1 年生 4 名（3.4%）の順であった。特定の宗教を信仰している者は、14 名（11.8%）であり、1 年以内に親しい人の死に直面した経験を有する者は、21 名（17.6%）であった。また、大震災をきっかけに死について考えるようになったと回答した者は、97 名（81.5%）であった。「死生観」の項目別得点は、「死への恐怖・不安」が最も平均値が高く（19.3±6.87 点）、続いて「死後の世界観」（18.5±6.46 点）、「人生における目的意識」（14.0±5.32 点）の順であった。

性別と「死生観」下位項目との検討を行ったところ、有意な差を認めなかった。特定の宗教では、宗教を信仰している群は、宗教を信仰していない群に比べて「死後の世界観」の中央値が有意に高く、「寿命感」も有意傾向（0.1<p<0.05）であるが高かった。親しい人の死では、経験している群は、経験していない群に比べて「解放としての死」「寿命感」の中央値が有意に高かった。震災後の死では、震災後に死を考えるようになった群は、そうでない群に比べて「死への恐怖・不安」「死からの回避」が有意に高く、有意傾向（0.1<p<0.05）であるが「解放としての死」「人生における目的意識」が有意に高かった。

上記の通り、宗教の信仰の有無で「死後の世界観」に有意な差が示された。「死後の世界観」は、「死後の世界はあると思う」「世の中には「霊」や「たたり」があると思う」「死んでも魂は残ると思う」「人は死後、また生まれ変わると思う」という質問項目から構成されている。こうした視点は、魂や精神性の永続性という議論とも関係しており、宗教的視座を有する学生群において中央値が高い事は理解できる結果と考えられた。

また、親しい人の死に対する経験の有無では、「解放としての死」「寿命感」において有意な差が示された。前者は、「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」「死は魂の解放をもたらしてくれる」、後者は、「人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う」「寿命は最初から決まっていると思う」「人の生死は目に見えない力（運命・神など）によって決められている」から構成されている。質問内容からも明らかな通り、どちらの下位尺度においても「死」に直面、または「死」を体験することにより、具体的な理解が可能となる内容から構成されている。すなわち、「死」を単なる事象と受け止めるだけでなく、「死」をその人の人生の一部として理解することが「死」に直面することで初めて可能になったと推察された。

さらに、震災後に死について考えるようになったか否かと死生観下位尺度について検討を行ったところ、「死への恐怖・不安」「死からの回避」に有意な差が示された。「死への恐怖・不安」は、「死ぬことがこわい」「自分が死ぬことを考えると、不安になる」「死は恐ろしいものだと思う」「私は死を非常に恐れている」の 4 項目、「死からの回避」は「私は死について考えることを避けている」「どんなことをしても死を考えることを避けたい」「私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれをはねのけようとする」「死は恐ろしいのであまり考えないようにしている」である。このように、どちらの下位尺度も、死に対しての直接的な認識を問う内容より構成されている。そうした中で統計的に有意な差を認めた背景には、震災時の報道が影響を及ぼしていることが推察された。つまり、人々が津波から避難している報道、大規模な火災、遺体を収容している報道などが「死」を自身にも起こりうる身近な出来事として認識させたと考えられた。さらに、映像を通して自身がその状況にある種の同化をすることが可能であったことが影響していると考えられた。このように社会的なイベントは、学生の死生観の中でも死の恐怖や不安という側面に大きな影響を及ぼす一方で、恐怖や不安を過度に煽りすぎることのないようその情報源となる報道内容の妥当性を十分に精査した上で適切な理解を図ることが教育において必要と考えられた。

以上の結果より、学生の死生観は、自身のライフイベントや震災などを始めとした社会的な事象により影響を受けることが明らかとなった。

②教育実践について

対象者の年齢分布は、18 歳が 1 名、19 歳が 2 名、22 歳が 2 名、23 歳が 1 名、24 歳が 1 名であった。性別は、すべて男性（7 名）であった。特定の宗教を信仰している学生が 2 名（28.6%）であった。1 年以内に親しい人の死を経験したと回答した学生は 2 名（28.6%）であった。授業前後での死生観の変化は、「死への恐怖・不安」「解放としての死」「人生における目的意識」において有意傾向（0.1<p<0.05）であるが差を認めた。その一方で、「死後の世界観」「死からの回避」「死への関心」「寿命感」では、有意な差を認めなかった。

下位尺度の「死への恐怖・不安」は、「死ぬことがこわい」「自分が死ぬことを考えると、不安になる」「死は恐ろしいものだと思う」「私は死を非常に恐れている」から構成されている。授業前の平均点が 22.3±6.2 点であり、授業後は 19.1±6.4 点へと低下していた。その理由としては、授業を通して学生が死を客観的に捉えるこことができるようになったと推察された。すなわち、死をライフサイクルの一部であることを学生が理解し、その結果、死への恐怖・不安が緩和されたことが考えられた。また、本研究の対象者が 20 歳前後と若い集団であることから 1 人称（自分）の死が自身の関心の中心であったと考えられるが、授業を通して 2 人称（身近な人の死）、3 人称（職務上の死）へと視野が広がったものと推察された。

下位尺度の「解放としての死」は、「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」「死は魂の解放をもたらしてくれる」から構成されている。授業前の平均点が 12.2±6.6 点であり、授業後は 14.7±8.2 点へと上昇していた。その理由としては、学生が死を単に終わりとして捉えるので

はなく、その人が過ごしてきた一つの終着地点であるとともに、解放されることによる新たな希望という視点で死を認識できるようになったためと推察された。たとえば、終末期の患者が死を迎えることは、これまでの闘病生活から解放され、言い換えれば、新たな希望を享受することができたという文脈の中で死を捉えることができる。このように、各人の人生における死を学生が考察する能力を身に着けることができたと考えられた。

下位尺度の「人生における目的意識」は、「私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している」「私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある」「私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている」「未来は明るい」から構成されている。授業前の平均点が 14.2±5.1 点であり、授業後は 15.0±5.0 点へと上昇していた。その理由として、死生観教育を通して、自身が専門職としてどのように利用者・患者の死と向かい合うべきであるのか、どのような役割を果たすべきであるのかという点が明確になったためと推察された。上述の通り、本研究の対象者が 20 歳前後であることから、人生における明確な目標、専門職としての誇りや役割を十分に認識することが難しい。そうした中で、専門職として必ず直面する死について教育を受けたことによって自身の目的が明確化されたものと考えられた。

以上より今回の教育プログラムの実践を通して、死生観の中でも「死への恐怖・不安」「解放としての死」「人生における目的意識」において変化を認め、教育プログラムの一定の有用性が認められたと考えられた。今後は、同様の教育を広く実践し、その妥当性の検討及び、教育を受けた学生のフォローアップを通して、教育の意義について検討を深めていくことが必要である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　3 件）

① 村上信、佐藤真由美、宮下榮子、濱野強、藤澤由和. 社会福祉士養成の学部教育における学生の死生観に関する意識調査. 淑徳大学研究紀要 2012. 46: 87-94.

② 村上信、濱野強、佐藤真由美、宮下榮子、藤澤由和. 社会福祉士養成の学部教育の在り方に関する検討：死生観調査を通して（第２報）. 淑徳大学研究紀要 2013. 47: 19-25.

③ 村上信、宮下榮子、濱野強. 死生観に関する教育実践の施行. 淑徳大学研究紀要 2014. 48: 145-150.

〔学会発表〕（計　　0 件）

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

村上 信（Murakami Makoto）
淑徳大学・総合福祉学部・教授
研究者番号：90333260

(2)研究分担者

濱野 強（Hamano Tsuyoshi）
島根大学・研究機構戦略的研究推進ｾﾝﾀｰ・講師
研究者番号：80410257

熊谷 忠和（Kumagai Tadakazu）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授
研究者番号：30341655

宮下 榮子（Miyashita Eiko）
新潟医療福祉大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：70440477

松井 奈美（Matsui Nami）
日本社会事業大学・実習教育研究・研修ｾﾝﾀｰ・准教授
研究者番号：00331364

(3)連携研究者

該当なし